

輝く功績

第64回岐阜新聞大賞受賞者

岐阜新聞社が県内の学術、教育、文化、産業、社会事業の各分野の発展に多大な貢献をした個人、団体・企業に贈る本年度第64回岐阜新聞大賞は、県内各界の学識経験者らによる選考委員会(委員長・森秀樹 岐阜大学長)の審査を経て、5氏と1社の受賞が決まった。贈呈式は15日午前10時からぎふチャンテレビスタジオで行われる。受賞者の顔や功績を紹介する。

感染症の研究やバイ。 菌株は検査法の開発の国家プロジェクトにも活用。ライフワイ協力し、学内の病原微生物として簡易で迅速に生物遺伝子資源保存センターで病原微生物の発見に取組んできた。菌株収集を統率。世界で3日以上はかかり、指定された病原体は通常、結果が出るまでコレクションを増やしてきた。感染症法は通常、結果が出るまで3日以上はかかり、全てをろい、学生や研究者、検査技師の教育用や、新薬開発を目指す企業に提供している。「診察を待つ時間に

岐阜大大学院教授

江崎 孝行氏

学術部門



「未知の微生物の解明など夢はいっぱいある」と話す江崎孝行教授＝岐阜市柳戸、岐阜大医学部

【えざき・たかゆき】1951年、熊本県生まれ。岐阜大医学部卒、同大大学院医学研究科修了。東京大医学研究所研究員などを経て90年から岐阜大医学部教授(微生物学講座)。現在、岐阜大大学院医学研究科教授(病原体制御分野)、岐阜大医学部病原微生物遺伝子資源保存センター長。日本細菌学会監事、日本臨床微生物学会監事、日本微生物資源学会長、日本感染症学会評議員などを務める。日本細菌学会黒屋賞、日本臨床病理学奨励会小酒井賞、日本微生物資源学会賞、小島二郎記念賞を受賞。自宅は岐阜市加納永井町。

病原体特定を簡易化

病原体を絞り込むことのできれば、初診でも過剰な薬を処方せずに済み、医療費も削減できる」。そこで考案したのが遺伝子を短時間で増幅すること。結果の出る検査キット。うがい後の液体を採取し、温度管理を徹底した遺伝子増幅装置

に入れて遺伝子を100万倍に増やし、検査紙を浸す。色づき具合で病原体を特定でき、1度に4〜6種類の病原体を網羅的に調べられる。現在は臨床データを集めており、「数年のうちに実用化した」と意欲を示す。

併せて、現在は5000円程度ある増幅装置をタレット端末サイズに小型化、軽量化して、持ち運びやすくする改良も進行中。在宅患者の訪問診療に携行できるようにするためだ。今回の増幅装置は数十万円です。国内でも普及可能と確信。検査キットを製造するベンチャー企業も立ち上げ、実

用化へ本腰を入れる。このほか、食中毒を起す食品の病原体汚染の有無について、出荷前に結果が出る新たな検査方法も開発し、食品メーカーなどに導入を働き掛けている。

研究では遺伝子を使った無芽胞嫌気性菌の分類体系を新たに構築し、その功績で、国際微生物連盟の命名委員に着任。細菌分類のバイブル「バーギーズマニュアル」の編集顧問も担う、微生物の分類の国際的な権威だ。帰還したロシアの宇宙船の中から新種の細菌を発見したこともある。「好きな微生物学を一生の職業にできたのは幸せ」と笑う。「地球に約500万種いる細菌のうち、ヒトへの作用が判明したのは約1万種とまり。未解明のことが多く、まだ、すべきことはたくさんある。夢は尽きない」。